

吉祥寺と井の頭公園から生まれたフリーペーパー

PARKS

パークス

ご自由にお持ち帰りください。
風の音も聴こえます。

vol,3

じかん／ばしょ／ひと

テキサス州オースティンのフェスティバルと日本をつなぐ

麻田浩・インタビュー

吉祥寺だけが住みたい街でした マキヒロチ

IN CINEMA, IN KICHIJOJI〈番外編〉

映画『PARKS パークス』参加ミュージシャンを一挙紹介！

吉祥寺の裏方たち——GOK SOUND 近藤祥昭インタビュー

まちと映画と音楽と。



映画が
完成しました。

吉祥寺と井の頭公園から生まれた映画

PARKS パークス

『PARKS パークス』は、音楽映画でもあるんです。
そして、映画は公園でもあるんです。



映画『PARKS パークス』より／写真：荻下雷太

ついに完成した映画『PARKS パークス』には、多くのミュージシャンが参加しています。通常の映画ではひとりの音楽家はその映画のために作曲するか、さまざまな既成の音楽を使用するか、あるいはその組み合わせによって映画の音楽は作られていきます。しかし『PARKS パークス』はそういった作り方とは違う方法で、音楽が出来上がりました。

すでにこの映画の音楽担当者として紹介されているトクマルシューゴさんは、「音楽監修」とクレジットされています。この映画のための音楽を作曲しましたが、すべてではなく、多くのミュージシャンにさまざまなシーンに合わせての作曲を依頼し、それをまとめるという役割。音楽部分の総監督、というようなイメージでしょうか。最初は10バンドくらいに音楽を依頼という予定だったのですが、結局はその倍くらいに膨らみました。

瀬田なつき監督作品 音楽監修トクマルシューゴ 2017年4月 テアトル新宿他にて全国公開

製作:本田プロモーション BAUS 製作プロダクション:オフィス・シロウズ
配給:boid 宣伝:VALERIA、マーメイドフィルム

父や祖母が60年代に残した1本のオープンリールテープ。そこに収録された未完成の音楽が、若者たちの手によって半世紀後に蘇る。それはかつてあった音楽でもあり今ここにある音楽でもあり、来るべき未来の音楽でもある。吉祥寺と井の頭公園を舞台に、あらゆる時代に鳴り響く音楽を、現在の若者たちとかつての若者たちが作り上げる、音楽青春映画。



映画はさまざまなシーンやショットから出来上がっています。多くのシーンやショットが寄せ集められてひとつの映画になる。さまざまな人々が集まってひとつの公園となるように。「公園」の映画として作られたこの映画もまた、ひとりの作り上げた音楽

だけではなく、多くの人の手を経て、思わぬ人との出会いを生む。そんな映画音楽になってくれたらと思っています。トクマルさんはそのための下地を作り、それぞれのミュージシャンがそれぞれのシーンを作り、そして映画を観た(つまり公園を訪れた)観客の方々がそれぞ

れがそれを完成させる。そんな映画が、そこでは夢みられています。

今号では、この映画に参加していただいたさまざまなミュージシャン、音楽関係者を紹介します。楽曲を提供するだけではなく、出演された方、場所を提供してくだ

さった方、音楽の歴史に深くかかわった方など、それぞれの方の歴史と音楽に対する思いを聴くだけで、いくつもの映画が出来上がってくるのではないかと思います。『PARKS パークス』もその中の1本として、多くの人に伝わっていくことができたらと思っています。



じかん
ぱしょ
ひと

No.03

街が作り出す 音楽と映画

テキサス州オースティンが生んだ全米を代表する
フェスティバルSXSW (サウス・バイ・サウスウェスト)

麻田浩 インタビュー

聞き手: 樋口泰人

写真協力 / SXSW Japan Rep: オードリーキムラ

テキサス州の州都オースティンは音楽と映画の街でもある。街中に多くのライブハウスが並ぶ。サイケデリック・ロックの代表的バンド「13thフロア・エレベーターズ」はこの街で結成され、ジャニス・ジョプリンはこの街の大学に通った。『スクール・オブ・ロック』や『6才のボクが、大人になるまで。』などで知られる映画監督リチャード・リンクレイターを中心としたアメリカの新しい映画の波も、この街から生まれている。革新的で新しい文化の土壌となるような、まさに「スクール・オブ・ロック&ムーヴィー」な街。

そんな街で「サウス・バイ・サウスウェスト(SXSW)」が始まったのは1987年。インディーズ・バンドのマネージャーたちが自分たちの音楽を多くの人に知ってもらうためのフェスティバルだった。

それがいつしか映画も加わり、そしてインタラクティブ部門も加わり、今や全米を代表するフェスティバルとなった。小さいけれども強いインディーズのスピリットが、いつしか世界中の音楽家たちの心をとらえたのだ。街と人と音楽と映画が最も理想的な形で結びついたSXSW。そんなフェスと深い関係を持ち、映画『PARKS パークス』でも、街と人と時代を結ぶ重要な役割で出演していただいた麻田浩さんに話を伺った。



2015年のSXSW オースティンの夜

——麻田さんがSXSWと関わりを持ち始めたのはいつ頃からですか？

麻田: 1995年くらいだと思います。僕は当時、ピチカート・ファイヴのマネジメントをやってたんですが、日本でなかなか売れなくて(笑)。でも外人の友達なんかが良いっていうので、海外に売り込むチャンスを狙っていたら、NYでニューミュージックセミナーという大きなコンヴェンションがあったんですよ。そこにピチカートを連れて行って売り込みしたら、アメリカでの発売が決まって20万枚くらい売れた。日本では3万枚くらいしか売れなかったのに(笑)。その後に日本にもってきたら同じくらい売れました。

——すごい。そんなに売れたんですね。

麻田:その後NYで、「PSYCO NIGHT」っていう、日本語の「最高」と英語の「サイコ」をかけた日本のバンドのショーケースをやりました。ピチカート他には、近田春夫くんのバンドとか、BOREDOMSとかも連れて行っていました。そうしたら、当時まだ有名でなかったSXSWの連中が来て、そういうのをオースティンでやってくれないかって言われて。最初はオースティンの音楽祭なんてと思ってて(笑)。そしたら、そのタイミングでニューミュージックセミナーが潰れちゃった。困ったなあと思って、SXSWを見に行ったら、意外とちゃんとやってるし、オースティンの街もすごくこじんまりしていて良かったから、こっちでやろうよということになりました。

最初の年は、ホッピー神山のやってたPUGSというバンドと、ロリータ18号を連れていったんです。そしたらすごいウケて、PUGSはすぐにレコード契約が出来て、向こうの大きなフェスに出たりしていました。それでこれは大丈夫かな、と思って97年くらいからずっと、20数年くらいやってますね。

——今は色々部門があるようですが、最初は音楽だけだったんですよね？ 当時、何人くらいでやっていたんですか？

麻田:もともとSXSWは3人のインディーズのマネージャー達が、

自分たちがNYに行ったり、ロサンゼルスに行ったりしないでも、オースティンで自分たちがやりたいようにインディーズを売るにはどうしたら良いのかという勉強会で始まってますよ。すごい数のセミナーをやっていて、夜になるとライブみたいな。だからセミナー自体も沢山のテーマがあって、インディーズ目線の企画が多くて刺激的でしたね。

——オースティンってすごくライブハウスが多いですよね？

麻田:当時からライブハウスが多い街でした。今もアメリカで1番多いんじゃないかな。SXSWの期間中は、大きいのは3000人くらいの大箱から、150人くらいのライブハウスまで60～100近い小屋でやってるから、メインの通りは両側から音が出っぱなしで(笑)。そんな感じですね、すごいです。

——どうしてそんなに多いのでしょうか？

麻田:それは雑多な音楽が沢山あるからだだと思います、例えば、カントリーと言えばナッシュビルなんですけど、ウィリー・ネルソンも最初はそこでカントリーをやっていたんだけど、それが嫌になってナッシュビルから故郷のテキサスに戻ってきたんです。落ち着いた先がオースティン。だから彼のことをアウトローカントリーというんです。それから、ブルースも、シカゴなんかとはちょっと違う南部のブルースがあったり、メキシコに国境が近いからテックス



2016年Japan Nite でのJungles from R.B.V.のライブ

メクスという音楽があったり、そういうごった煮の場所で、だからライブハウスもミュージシャンも多いということじゃないかな。それでSXSWは『北北西に進路を取れ』(*1)のパロディなんです。NYから見てオースティンって南南西なんですよ。だからまあ、SXSW (サウス・バイ・サウスウェスト) って言うらしいです(笑)。
(*1)アルフレッド・ヒッチコック監督、ケーリー・グラント主演の1959年製作のアメリカ映画。タイトルの North by NorthWest という方位は現実には存在しないと言われており、タイトルの由来は諸説ある。

——SXSWの時期にオースティンに行くと、街をあげてフェスという感じなんですか？

麻田：ええ。本当にすごいですよ。むしろ僕なんかはあまりにも大きくなりすぎてって感じもありますが、経済効果もすごいあるみた

いです。だからこそ、こんなことをおおらかに許して貰える環境もあるってことなんでしょうけど。それと街自体はすごくいい街で、州でもあるし、大きな大学があって学生が10万人くらいいて、比較的アカデミックなところなんですね。それはすごく感じます。テキサスの中でもヒューストンだとかダラスだとかとはまったく違う。

街並みもオースティンは、いい感じにこぢんまりとしています。コンヴェンションセンターを中心にして、シックスストリートという長い通りがあって、その両側にはライブハウスやクラブがずらりと並んでいます。

——SXSWに遊びに行くには、車がなくても大丈夫ですか？

麻田：全然大丈夫ですよ。SXSWは中心部でやってるから問題ないです。あとはあんなに大きくなっちゃったから、静かに過ごしたい地元の人が、期間中自分たちは休暇に行って家を貸してもらってるんですよ。それと食事なんかも美味しいですね。「Whole Foods」っていう、いまやアメリカじゅうにある有機栽培のスーパーマーケットはオースティンが発祥の地です。そういう土壤があるんですね。

——麻田さんの仕事は、マーケットへの売り込みってことですよね？

麻田：そうですね。向こうでやってみたいという連中とかの、まあ売り込みですね。Electric Eel Shockとか、そこから出たパ

ンドもいます。PUFFYも2000年にSXSWに出演して、少ししてから『ハイ!ハイ! パフィー・アミュミ』というアニメになって全米でプレイしたり。世界110カ国以上で放送されたそうです。

——出演バンドの審査はSXSWがやっているのですか？

麻田：はい、そうです。だから日本から応募するバンドやミュージシャンで、日本ですごく有名でも落とされてるバンドはいっぱいいます。

——その辺は面白いですね。本人たちは大変でしょうけど(笑)

麻田：アメリカのアーティストだと新人の登竜門みたいなことを言われています。例えばノラ・ジョーンズが最初にSXSWでやった時は、デビューアルバムがリリースされてすぐだったんですが、ほとんど誰も注目していなかった。それでSXSWでライブをやったら、僕も見たんですけどすごく良くて。そこで噂になって、噂が噂を呼んでグラミー賞にノミネートされて翌年グラミー賞を獲ったみたいな。そういうシンデレラストoryっていうのはありますね。

——当時からもう映画はやっていたんですか？

麻田：いや、映画はもっと後からです。音楽が最初で、その次に映画、それからインタラクティブ。今でもその3つがメインです。最近はもっと「エコ」に加えて「エデュケーション」など多彩になっていますが、基本的にはその3つがメインですね。そのバランス



2010年『キック・アス』が上映されたパラマウントシアター

が非常に上手くいっている感じがします。今は特にTwitterとかFacebookとかで一気に有名になった経緯があり、今はインタラクティブ、IT関係が1番大きいですね。

——映画部門はどうなのでしょう？

麻田：SXSWの性格上、やはり音楽映画が多いです。ニール・ヤングやトム・ウェイツの映画をやって、本人たちが来てライブをやったりね。そういえば、レジデントの映画『Theory of Obscurity』も昨年上映されましたよ。

——音楽系の映画が増えたのは、映画自体が、ビデオをパソコンで編集できるようになって、ドキュメンタリーなどを撮りやすくなったっていうのが大きかったんですかね？ そう言えば、



独自プロジェクトで開発したハイレゾプレイヤーのプロモーションに訪れたニール・ヤング(2014年)

boirdでもその頃、イギリスのRecommended Records というレーベルのクリス・カトラーというドラムの人の叩き方が面白いので、これは音で聴かせるよりも観せたほうが伝わるだろうと思って、『June 12 1998 —カオスの縁—』(青山真治監督)という音楽ドキュメンタリーを、我が家のパソコンを使って作りました。それが98年なので、当時SXSWとかを知っていたら出してたかも(笑)。

麻田: だから映画作りの方法がデジタルへと以降してきた時期と、SXSW映画部門の始まりが同じ頃だというのは、ひとつ大きな流れの中にあるものだという気がします。

そしてそれがさらに進むと、音楽と映画とがデジタル技術を紹介してさらに強く結びつくんです。2015年にPerfumeが出演した時に、インタラクティブデザインをライゾマティクスの真鍋大度さんが手がけたんですが、それがすごく評判が良かったんです(*2)。

映像部門と音楽部門が1日だけ重なる日があって、その日に絞ってやったんですが、音楽にもビジュアルにも興味がある人が沢山いて、みんなすごく良かったって言うてくれて。

(*2)この模様はYouTubeで世界に向けて生中継されたが、ライブ映像と3DのCG空間の映像を行き来しながら、あらゆる角度からパフォーマンスを観られる驚きのシーンもあった。世界最先端のテクノロジーが発表される祭典で前代未聞の演出を披露し、現地の観客や世界中の動画視聴者を驚かせた。

——そういうチャレンジを許してくれる環境があるんですね。

麻田: オースティンの大きなテーマが「KEEP AUSTIN WEIRD」と言って、とにかくオースティンを変な街のままにしておこうっていうのがあります。変なものを受け入れる要素ってすごくあるんですね。あの標語が確かにオースティンを表してますね。

——デヴィッド・ボウイが死んだ時も道路標示を描きかえたやつが話題になりましたよね(笑)。

麻田: あそこはボウイ・ストリートっていうんですけど、その表示の

看板を勝手にはずしてデヴィッド・ボウイ・ストリートにしちゃったんですね。最初は誰も気がつかなかったって。

——最近で記憶に残っている面白い音楽や作品はありましたか？

麻田：一昨年、レディー・ガガが来たんですよ。で、その前の年はブルース・スプリングスティーン。あとやっぱり今はラップがすごいですね。ここ2年ぐらい。個人的には、ブルースのギタリストでゲイリー・クラーク・ジュニアっていう人いるんですが、彼はすごくいいですね。



2014年にはレディー・ガガも登場した

——今やそんな大物が来るんですね。ただ、これだけ大きくなって、未だに殆どボランティアの人がやってるし、インディーズのマインドみたいなものはずっと残っているように感じます。

麻田：そうですね。SXSWを始めた3人の人のうち2人は亡くなっちゃったんですけど、そのマインドはみんな大事にしています。大手が入って来ても、それは変えちゃいけない部分という



麻田さんは映画『PARKS パークス』で、主人公たちの心をつなぐ重要な役で出演
映画『PARKS パークス』より／写真：藪下雷太

か。特に何かの文章になっていたりする訳ではないんですが、単純に受け継がれてきたということでしょうね。

広告代理店とかも結構な数来んですけど、それは「次のトレンドが何か」っていうのを見に来るんですよね。でも、それは違うと思っています。流行りものを追いかけるんじゃないくて。自分たちのもっと足元から湧いてくるものを見ていくってことかな、と。それが「KEEP AUSTIN WEIRD」ってことだと思っています。

麻田浩(あさだ・ひろし) | 1944年横浜生まれ。明治学院大学入学後、マイク真木等とモダンフォークカルテット(MFQ)を結成。カレッジフォークを代表する人気バンドになる。何度かの渡米を経て、70年代後半からはトーキング・ヘッズ、エルヴィス・コストロ、トム・ウェイツ、ジェームズ・ブラウンなどのミュージシャンを招聘するほか、日本のミュージシャンの海外紹介など、海を越えての活動を続けている。

吉祥寺 だけが 住みたい 街でした

マキヒロチ

3

マキヒロチ | 冒頭に吉祥寺ハウスシアターの閉館の話題が登場するコミック『吉祥寺だけが住みたい街ですか?』の作者。吉祥寺で不動産業を営むにもかかわらず、吉祥寺に住まいを求めてやってくる客たちを吉祥寺の外へと案内する女性を主人公とするこの作品は、そこにある吉祥寺への裏返し愛とともに多くの読者の心をとらえ、現在も「ヤングマガジン サード」誌に連載中。安藤なつ、大島美幸主演のテレビ版は、テレビ東京ほかにて、毎週金曜日深夜0時52分より放映中。
logo design: siun | 小酒井祥悟が2013年4月に設立。「TO magazine」や「& premium」のwebsiteなどをデザイン。

映画『PARKS パークス』がもうすぐ完成するとboidの樋口さんから連絡があり、いよいよだなあと思うのと同時に、改めて映画のストーリーを確認。ニュースサイトには「主人公がひょんなところから、50年前の音楽の断片を見つけて、様々な人に会って音楽を完成していく話」と書いてある。そうそう、吉祥寺と音楽の映画だったな。

私は吉祥寺に行きつけのジャズ喫茶やライブハウスがあるわけではないので、吉祥寺に特別な音楽の関わりは見出せてないけれど、学生時代に今の自分を構築してくれたCD・音楽を手に入れる場所は吉祥寺の新星堂かタワーレコードかディスクユニオンのどれかでした。ロンロンの改札が一番近い場所にあった新星堂は、今はアトレの改札から一番遠いところに移り、東急裏にあったタワーレコードは、ヨドバシの上に移り、ディスクユニオンは場所は変わらずともリニューアルして綺麗になってしまいました。新しい姿になって時間も経ったのでどの店にも昔の面影を求めることはもうなくなってしまったけれど（音楽はネットで買ってしまうようになってしまったし）昔大好きだったCDのジャケットを見たら全てどこで買ったか容易に思い出せしう自信があります。

初めて自分でCDを買ったのは新星堂で、その時に買ったのはレベッカのベストアルバム。中学の時に文通してくれた優しいジョージ朝倉さんが「これっかわいいよ!」と教えてくれたレッチリの『ブラッド・シュガー・セックス・マジック』を買ったのはタワーレコード。大好きなハイスターのCDはいつもユニオンで買っていました。ユニオンは逆にCDをよく売りにも行ってたし、当時スタンブカードがあったなあ……! 記憶を辿ると、早く家に帰ってCDを聞きたいと、逸る気持ちを抑えて帰ったバス停の道のりまで思い出せしいます。マルイの前の信号が長かった……。

そう考えると、吉祥寺がなかったら、私はどこで音楽と出会っていたのだろうか? 全く想像つかないな。私の中で吉祥寺と音楽の関係は実は密接な関係があったんだな! そして、全く関係ない話ですが、夜にサンロードで歌うミュージシャンはいつも気持ちよさそうだなと思います。新宿や渋谷より通り過ぎる人が優しい気がするし。今度ちゃんと立ち止まって聞いてみようかな。そして昼間何してるのか一度だけでいいから聞いてみたい。



あゝ
北口商店街



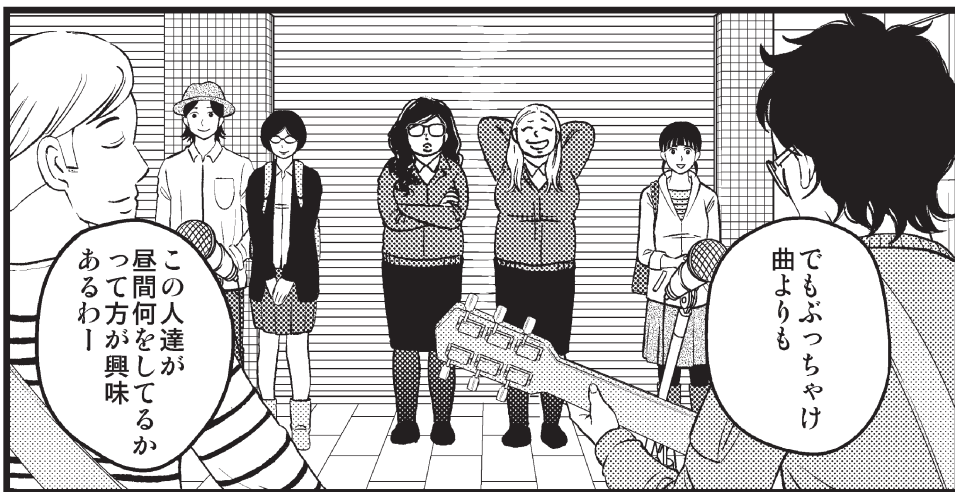
待って
います

今日も
あなたと



ユーチューブに
あげりやいいのに
どうしてもここで
歌いたいのかな

夜のサンロードには
昔も今も歌う
ミュージシャンの姿が
ちらほら



でもぶつちやけ
曲よりも

この人達が
昼間何をしてるか
あって方が興味
あるわー

IN CINEMA, IN KICHIJOJI

番外編



プロフィール代わりに、それぞれに好きな音楽映画を挙げていただきました。これらのミュージシャンの音が鳴り響く『PARKS パークス』を想像しつつ、さまざまな音楽映画に思いを馳せてみたら、きっとまた楽しい音楽が聞こえてくるはずですよ。

- 1) この映画に参加したバンド名
(個人の方は個人名)
- 2) 担当楽器
(個人の方は今回使用した楽器など)
- 3) 好きな音楽映画1タイトル

映画『PARKS パークス』へ参加した ミュージシャンのみなさんを一挙ご紹介します！

1) **Alfred Beach Sandal** / スタジオを使用するミュージシャンとして出演(北里彰久)、楽曲提供

2) 北里彰久: ボーカル、ギター / 岩見継吾: ウッドベース / 光永渉: ドラムス

3) 『ザ・シャウト』(イェジー・スコリモフスキ監督 / 1978年) ◆ ピー玉を転がす音やガラクタを弓で弾く音、虫の羽音(の録音)。シンセサイザーのノイズ、教会のパイプオルガン、人を殺せるほどの絶叫(!) 不安をかき立てるような

音の数々と、妖しくてミョーなプロット。幻想の音映画。面白すぎて笑っちゃいます。(北里彰久)



1) **石坂智子**(惑星のかぞえかた) / 楽曲提供

2) **ピアノ**

3) 『オズの魔法使』(ヴィクター・フレミング監督 / 1939年) ◆ 幼少期に繰り返し観た作品です。憧れ、恐怖、勇気、知恵、友情など、オズの国での冒険は、主人公達にも、観ている私達にも多くの大切なことを教えてくれます。CGのない時代にアナログ手法で築き上げられた完璧なファンタジー世界は圧巻。全編にちりばめられた輝くオーケストラサウンドは、いつも私を"心配事のない世界"の入り口に立たせてくれる、魔法そのものです。

1) **Molt Beats** / 楽曲提供 2) Hayashida Ryota (Iroha Studio) : エンジニア / Ueno Takashi: ギター (on "Majesty") / 山口元輝: ほかに全楽器

3) 『グロリア』(ジョン・カサヴェテス監督 / 1980年、シドニー・ルメット監督 / 1999年) ジョン・カサヴェテス監督の音楽はビル・コンティですが、シャロン・ストーン版(99年)を担当したハワード・ショアーが好きです。(山口元輝)

1) **谷口雄** / 劇中のバンド「ジュラシック・パークス」のメンバーとして出演

2) **鍵盤楽器**

3) 『ファントム・オブ・パラダイス』(ブライアン・デ・パルマ監督 / 199年) ◆ 中学生時代、親に隠れて深夜のテレビ映画を観るのが大好きだったのですが、中でもこの作品のスピード感、悲惨なのに何故か笑えるストーリー、何より劇中の音楽に大ショックを受けました。後になって振り返ってみると、音楽はポール・ウィリアムスで、ジェフリー・コマーナーが参加したりしていて、僕のロックの原体験はこの映画かも。



1) **パスカルズ**／楽曲提供 2) (使用曲参加メンバー)ロケット・マツ:マンドリン／あかね:トイピアノ／斉藤哲也:ピアノ／金井太郎:ギター／知久寿焼:ボーカル、ウクレレ／永畑風人:ガスホース／石川浩司:おもちゃ、パーカッション／横澤龍太郎:ドラムス 3) 『**アルゲリッチ 私こそ、音楽!**』(ステファニー・アルゲリッチ監督/2012年)◆この映画を見るまで、アルゲリッチという人をよく知らなかったのですが、彼女のこれまでの人生の大問題について質問をされる度、はぐらかすのではなく、ただばーっと、「よくわからないわ、言葉にできない。」などと、毎回答えている姿がすてきでした。これ以降アルゲリッチの音楽をよく聴いています。(ロケット・マツ)

1) **岡田拓郎**／楽曲提供 2) **クラリネット、MS-10、RE-201**
3) 『**オーケストラ・リハーサル**』(フェデリコ・フェリーニ監督/1978年)◆デリケートな題材の描き方、これぞユーモアと思いました。どこまで合わない器楽音と演者の当て振りも面白いです。

1) **yunniko**(YankaNoi)／楽曲提供
2) **ウクレレ、鉄琴、ピアノ、トイピアノ、マラカス、トライアングル、カスタネット、手拍子、声**
3) 『**アニー**』(ジョン・ヒューストン監督/1982年)◆冒頭の掃除のシーンは最高!

1) **池上加奈恵**(団楽)／劇中のバンド「ジュラシック・パークス」のメンバーとして出演 2) **ベース**
3) 『**永遠のモータウン**』(ポール・ジャストマン監督/2002年)◆ジェームズ・ジェマーソンが好きなので。

※『永遠のモータウン』はレコーディング・バンドとしてモータウンを支えたファンク・ブラザーズの評伝『伝説のモータウン・ベース ジェームズ・ジェマーソン』をもとにして作られたドキュメンタリー。



1) **イトケン**／楽曲提供 2) **エレピ、トイピアノ、シロフォン、パーカッション、シンセサイザーほか**
3) 『**シング・ストリート 未来へのうた**』(ジョン・カーニー監督/2015年)◆80年代という背景が自分の青春時代ドンズバ。人間関係から色々なディテイルまでが本当にキュンキュンくる映画。使われている音楽がDURAN DURAN、THE CURE、THE JAMと狙い撃ちされているんじゃないかというぐらいのラインナップ。それに加えて劇中のオリジナル曲の80年代風のアレンジの完成度の高さなど、見どころ満載。

1) **granpucino tetumpo**(グランベチーノテツンポ)／楽曲提供
2) **木下和重:ヴァイオリン／戸井安代:クラリネット:バスクラリネット／大河原明子:ホルン／mmm:フルート／イトケン:打楽器ほか／倉林哲也:チェロ、ギター、フロアタム**
3) 『**がんばっていきまっしょい**』(磯村一路監督/1998年)◆淡い青春時代。まだ何も成し遂げていない頃の頑張る想いがひとつひとつ積み重なり、仲間が集まる。ごちそう館をとる女子ボート部。たまに息抜きで金揚げうどんを食べたり、お茶目な色恋沙汰あり。上質なコース料理のような、気持ちを揺さぶりながらずっとここにいたいと思わせる、愛着湧く作品です。ラスト、降り始めた雪が積もる下校中の告白シーンは白飯のようなほっこりした気持ちになりました。(倉林哲也)



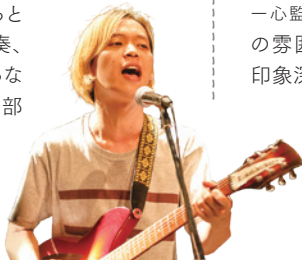
1) **井手健介**／劇中のバンド「ジュラシック・パークス」のメンバーとして出演、楽曲提供 2) **歌とギター**
3) 『**ハッスル&フロウ**』(クレイグ・ブルュー監督/2005年)◆メンフィスのスラム街でボン引きとして生計を立てている男が、もう一度ヒップホップを始め、巡ってきたチャンスに賭ける、という書いてて恥ずかしくなりそうなお話ですが、これがもう本当に最高なんです。登場人物みんな良い感じにひどくて、それゆえに彼らの熱いものが重なり合っとうねりが生まれていく様を見ている内にこちら巻きこまれて涙を流さざるをえないという、傑作です。



- 1) 澤部渡(スカート)／公園で歌うミュージシャンとして出演
- 2) アコースティックギター弾き語り
- 3) 『スコット・ウォーカー 30世紀の男』(スティーヴン・キジャク監督/2006年)◆2010年、スコットのドキュメンタリー映画がバウスで上映にかかるを知って、それまで決して熱心なファンではないにせよ、数枚のアルバムを聴いてこの人は一体どういう人間なんだ、どういう発想で音楽を作るんだ、と不思議に思っていたので軽い気持ちで観に行ったはずがそれまで知るはずもない音楽でとても大きな衝撃を受けました。

- 1) 栗コーダーカルテット／楽曲提供
- 2) 栗原正己:ソプラノリコーダー、テナーリコーダー、グロックケンシュピール／川口義之:アルトリコーダー、テナーリコーダー、シェイカー／関島岳郎:グレートバスリコーダー、チューバ
- 3) 『ファンタジア』(ベン・シャープスティーン監督/1940年)◆恐ろしいほどの時間と労力、そして膨大な予算と先端技術を注ぎ込んで、最高な妄想を映像化した作品。栗コーダーのメンバーそれぞれ好きな音楽映画はいろいろありますが、一番斬新でアバンギャルドでリリカルな音楽映画は『ファンタジア』ではないかなあ。選曲と曲順も最高、「禿山の一夜」から「アヴェマリア」で涙。(関島岳郎)

- 1) シャムキャッツ／ライブシーンに出演、楽曲提供
- 2) 夏目知幸:ボーカル、ギター／菅原真一:ギター／大塚智之:ベース／藤村頼正:ドラムス
- 3) 『STOP MAKING SENSE』(ジョナサン・デミ監督/1984年)◆映画が始まってから終わるまで、ずっとカッコいい。とにかく隅々までカッコいい。曲や演奏、演出はもちろん、僕は映画のことは語れるほど知らないけれど、アングルとか、編集とか、カッコいい。全部カッコいい。何度見ても興奮します。(夏目知幸)



- 1) **ENERGISH GOLF**／楽曲提供
- 2) 花澤貴大:トラックほか／OK:ギター／新聞功人:ベース／高山幸男:ドラムス
- 3) 『ヤング@ハート』(スティーヴン・ウォーカー監督/2007年)◆友人が、愛する女性を失うことがあって落ち込んでたので、誘って見に行きました。平均80歳の老人合唱団がパンク、ロック等を歌う実録映画。年齢も年齢だ。時には亡くなる団員もいて、無慈悲に「人はみんな死ぬ」という現実を見せるけど、瑞々しく熟成を重ねたコーラスは強く優しい。老いよう! (花澤貴大)

- 1) 井の頭レンジャーズ／楽曲提供
- 2) 万助橋わたる:ギター／いせや間太郎:キーボード／藤村明星:ベース／佐藤メンチ:ドラムス／高橋一:トランペット(courtesy of 思い出野郎Aチーム)／増田薫:テナーサックス(courtesy of 思い出野郎Aチーム)／ハットリ"ショーティ"ヤスヒコ:トロンボーン(courtesy of YOUR SONG IS GOOD)／高木壮太:作曲、レコーディング、プロデュース
- 3) 『スパイナル・タップ』(ロブ・ライナー監督/1984年)※架空のバンド「スパイナル・タップ」の全米ツアーの模様を伝える擬似ドキュメンタリーとして作られた、音楽パロディ映画。

- 1) 遠藤里美(biobiopatata)／楽曲提供
- 2) ピアノ
- 3) 閉館時の再映の際にバウスシアターで見た『グーグーだって猫である』(犬童一心監督/2008年)は、閉館の雰囲気も手伝ってとても印象深く残っています。

- 1) 大友良英／楽曲提供
- 2) 大友良英:ギター／トクマルシューゴ:ピアノ
- 3) 『どですかでん』(黒澤明監督/1970年)◆これオレは音楽映画だとすら思ってます。武満節の真骨頂。海外のものなら劇番のまったくでない『牯嶺街少年殺人事件』(エドワード・ヤン監督/1991年)の音楽の使い方は、まさに音楽映画。てか、この世のかんりの映画は、オレにとっては音楽映画です。





1) **高田 健**／スタジオを使用するミュージシャンとして出演、楽曲提供、楽曲提供 2) **ギターほか全楽器**
3) 『**レッキング・クルー 伝説のミュージシャンたち**』(デニー・テデスコ監督/2008年)◆フィクション、ノンフィクション問わず音楽映画は大好きですが、数々の名曲を奏でた影の音楽家集団のドキュメンタリーの『レッキング・クルー』は特に好きです。60年代頃の西海岸のスタジオのフレッシュな空気感が感じられるはずです。

1) **NRQ、牧野琢磨**／楽曲提供 2) **牧野琢磨**：作曲、ギター／中尾勤二：ドラムス、トロンボーン、サクソフ／吉田悠樹：二胡／服部将典：ベース／〈サポート〉谷口雄：ピアノ／片岡敬：録音、ミックス 3) 映画音楽でなくて、音楽映画となると、途端に難しくなりますね。思い出すのは2年前、下の娘を出産間近の妻が分娩室でジョン・フェイフィを聴いていた気が狂いそうになって、とっさにかけた『**カリフォルニア・ドールズ**』(ロバート・アルドリッチ監督/1981年)のサントラで事なきを得たことです。(牧野琢磨)

1) **Gellers**／楽曲提供 2) **川副賢一**：ボーカル、ギター／田代幸久：キーボード／大久保日向：ベース／トクマルシューゴ：ギター／藤村頼正：ドラムス
3) 『**ペンダ・ビリリ! へもう一つのキンシャサの奇跡**』(フローラン・ドゥ・ラ・テュール監督/2010年)◆窃盗、殺人、当たり前のゲッター。身体障害&ホームレスという苦悩を抱えつつも、果てしなく太く生きる男達のメッセージ。「いいダンボールを持った、人生は捨てたもんじゃない」と歌うTonkara。「ギャングに入るな、人を殺してはいけないよ」と歌うMozikiなど、学校では教えてくれない、正し過ぎる言葉が胸を打つ感動の名作。(川副賢一)

1) **吉木 諒祐**(THE NOVEMBERS)／劇中のバンド「ジュラシック・パークス」のメンバーとして出演 2) **ドラムス**
3) 『**はじまりのうた**』(ジョン・カーニー監督/2013年)◆日常の描き方が絶妙なのと、音楽の素晴らしさを再認識させてくれる映画。無理にハッピーエンドではないところも良いです。劇中音楽も最高です。



1) **高城 晶平**(cero)／楽曲提供
2) **劇中歌「PARK MUSIC」ラップパートのリリック制作**
3) 『**オンリー・ラヴァーズ・レフト・アライヴ**』(ジム・ジャームッシュ監督/2013年)◆世を忍んで暮らしている吸血鬼が人知れず退廃的な音楽を製作している映画(それが主題なわけではないですが…)。出てくるヴィンテージ機材や吸血鬼の偏屈さが良い。後半に出てくるレバノンの音楽家ヤスミン・ハムダンも印象的だった。

1) **vapour trail**／楽曲提供 2) **松本頼人**：ableton live
3) 『**恋する惑星**』(ウォン・カーウアイ監督/1994年)◆この王菲の壮大なミュージックビデオで描かれる香港の街に魅了され香港に行きたいや今からでも遅くはない香港に移住する事だって出来るはずと香港での生活に想いを馳せるもののそんな度胸も行動力もないため夜な夜なストリートビューで香港の街を散策する日々を過ごしている。

公園の歌姫も 友情出演

井の頭公園のファンの方にはお馴染みの「井の頭公園の歌姫」あさみちゆきさん。公園の映画を作るのに、2001年から始めた井の頭公園での



写真提供：シーニックス

ストリートライブをきっかけに、プロの歌手へと羽ばたいたあさみちゆきさんを欠かすわけにはいきません。今回は歌の出演ではなく、公園以外のあるシーンに当たり前のようによ顔をします。あまりに馴染んでいるゆえに見逃してしまう方も多いかも。要注意。なお、あさみちゆきさんは今も、毎月1回の割合で井の頭公園でのライブを行なっています。こちらも要注目です。

吉祥寺の裏方たち



第三回

GOK SOUND 近藤祥昭 インタビュー

吉祥寺の五日市街道沿いに控え目に佇む音楽スタジオGOK SOUND（ゴック サウンド）。ここは、ホッピー神山さん、大友良英さんなど数多くのミュージシャンのミックス／PAを手掛け、高い信頼を得ている日本屈指のスタジオだ。ここで録音された名盤は数知れず。映画『PARKS パークス』のロケ地ともなったこのスタジオの主である近藤祥昭さんに、じっくりお話を伺いました。

吸音材が無いことがスタジオのウリ

——GOKスタジオを立ち上げたのは何年前ですか？

近藤：最初は国分寺で数年やってたんですが、吉祥寺に移ってきたのは1994年。22年前です。ただ地下がぼかんと空いていて、柱が4本あった状態で一から作り始めました。まず、何をやったかという、コンクリートの床を作って、壁を張って小さいスタジオを二つ作りしました。

——それって、近藤さんが自分でやったんですか？

近藤：さすがに最初の一部屋だけは、業者にやってもらって、それをよく見ながら、こうやればいいんだ、っていうのを見て、そこからは自分でやりました。スタジオをやる前に、長く舞台音響をやっていたので、どういう場所だと、どのように音が鳴るのか、響くのか、というのは大体分かっていたんです。スタジオの防音工事は、通常、吸音材というものを壁に貼るのですが、それは一切貼らないでくれとお願いしました。一般的には、音が反響してよくないと言われていますが、中に人が入って、楽器を演奏すると、人が丁度良い乱反射体になると思っていたので、それは一切無しでいいです、と。むしろ、それをスタジオのウリにしたいので、と言いました。だから、ミックスルームは別にして、未だに吸音材は使用していません。

——吸音材を貼らないスタジオのアイデアはどこから出てきたのですか？

近藤：普通のスタジオで、若い人たちのバンドを見てると無駄に力が入る演奏をしているんです。分かりやすいところだとドラムなんですが、親の仇のように激しくシンバルを叩くんですよ（笑）。なんでそんな激しく叩くの？って聞くと、聞こえないって言うんですよ。じゃあここでやってごらんって叩いてもらおうと、あって気付く。そんなに激しく叩かなくてもきちんと音が出るんだって分かるので、無駄な力が抜けるんです。

——なるほど、演奏自体が変わってくるんですね。

近藤：スタジオという場所は、ある意味で鏡のように考えてもらって欲しいんです。今、自分たちがどういう音を発しているかが分かるように、音が跳ね返ってくる場所。そうすると無駄な音が出ている場合は、やっぱりそれが無駄な音だと分かるようになります。そうやってアンサンブルが上手くなっていくと、自然に全体が鳴りだすような感覚になる。それは当然、録音にも練習にも活かせることで、そういった経験値を積んでもらえるようにと思って、今までそういうコンセプトでやってきたんです。

音の〈かぶり〉が立体的な音像を生み出す

——他のスタジオは今、どういう状況かというのはご存知ですか？

近藤：はい、まあ日本式に多いのですが、やっぱり反射しない音場でスタジオを作ることが多いです。それから録音の時に、一般的に多いのが、例えばギタリストAのマイクに、ギタリストBの音が被って入っちゃうのを嫌う傾向があるんです。何故かという、ギタリストBが間違えた時に、AにBが間違えた音が入っちゃうから、やり直さなきゃいけない。でも、それは間違えなきゃいいんだろ？って思うんですよ(笑)。例えば、その音をばらばらにセパレートして録っていくと、音像は全部二次元的に平面に並ぶんですよ。逆に、こういう立体の場所で演奏すると、お互いの音がうまく被っている。あるアンサンブルでこっちが大きな音を出してると、その被りも比例して、別の音も増える。お互いにちゃんと相関関係があって、その空間を共有したっていう音場が、お互いに被っていると出るわけですよ。そうすると音に立体感が出てくるんです。逆に、全く被りがない状態で、セパレートで録っちゃうと、それが無くなってしまう。実は高校生くらいの頃から、日本の録音は、ヨーロッパやアメリカの音楽と比べて立体感がないな、と思っていました。

——最近では、スタジオを使わなくてもパソコンなどで宅録で音楽を作ることが多くなったと聞きます。

近藤：それは確かにあります。大友良英さんはPro Toolsカルチャーって言ってましたが、家で出来ない楽器、例えば、部分的にドラムだけここで録りたいとか、ピアノがないからピアノを録りたいとか、その後の作業は自宅のパソコンの中でっていうのが激増しました。

でも、それはとても冒険がしにくいんです。例えば、ドラムを録音する



時に、アグレッシブな音で録っておいて、全体はこういう風にしたらどう？っていう発想があったとしても、その段階で、アグレッシブにいかか穏やかな方向にいくかはわからないわけであって、そうすると、アグレッシブに録ったものを、後で穏やかにするのは難しいんです。その逆もしかりで。そうすると当然、無難なところでしか録らないようになってしまう。いまいち冒険が出来辛くなるということは感じます。パソコンの中で作った作品が、どれも質感が似ているように聞こえるのは、それが原因じゃないかな、と僕は思ってます。はっきりした音というのがあったら、はっきり録っておくべきだし、優しい音にしたいなら、最初からちゃんと優しいということを突き詰めて録る。録る段階でベストを模索する。どの段階でもベストが必要であって、あとでパソコン上でっていうのは僕はよくないな、って思っています。

アナログ機材から教えてもらうこと

——そうやって録音に意識的にスタジオを使用される方は今でも結構いますか？

近藤: いますね。逆にこここのところ増えてきたようにも感じます。でも、勘違いしている人も多くて、「演奏ミスったら全部やり直しなんですか?」とか(笑)。あとアナログに過剰な期待をして、アナログテープで録音をしたいって人もいます。でも、アナログなんて、テープやら機材の限界まで追い込まないと味が出てこなくて、当然ながらアナログはアナログで大変なことが沢山あります。まあ必要なことなんですけれど、かなり燃費は悪いのは確かです(笑)。

——かなり古い機材が沢山ありますが、これらは未だに現役で使っているのですか。



近藤: 修理しながら使ってますよ。例えば、これはスネア用に使っているマイクですが、高三の時に、福島の地元のオーディオ店でバイトしてた時に買ったものです。卒業したら東京に行ってPA屋を始めたいと思っていて、注文して取り寄せてもらったマイクなんです。買ったのが75年なので40年以上使っています。

——すごい…！そんなに古いものを使い続けているのはやはり音がよいてことですか？

近藤: そうですね。慣れてるのもあるんですけど、今のマイクだと、なんというか、まったくした感じが出ないんです。なんでもハイスピードに

なってます。例えば、カメラのレンズでもそうですが、今ってコンピューターで設計しているから、色合いとか解像度とかのバランスのよいものを作ろうとするんです。だけど、昔のものって、とにかく解像度がいいとか、とにかく色合いが、コントラストがいいものとか、一芸に秀でた、製作者の意図が反映されたものが多いんですね。それと、物(モノ)として丁寧に作られているから、やはり長持ちするんです。今は、そこをどんどんコストダウンでいくから、修理はできないけれども、最初の値段が安いっていうものがほとんどと思うんです。スマホもそうですよね。いつかディスプレイが割れるのを見越して、最初から買い換えを見越して作っている。

——そういうのはまったく違うということですね。ちなみに、これはおいくらなんですか？

近藤: 三万円です。当時としても高価なものだったんです。高校生が普通に入る値段ではないですよ。もちろん、もっと安いものもあって迷ったんですが、長く使おうと思って決めました。でも、当時は使いこなせなかったんですよ。いいマイクなんですけれど。でも、これに教わることもきっとあるだろうと考えたんです。だから、自分を育てた機材でもあるんだなあって、今になってみたら思いますね。欠点も色々あるんですが(笑)。

——GOKの原点ということですね。貴重なお話しありがとうございました。

お店情報

GOK SOUND

所在地: 東京都武蔵野市吉祥寺本町1丁目33-10 ☎0422-20-8372

The PARKSIDE ROOM

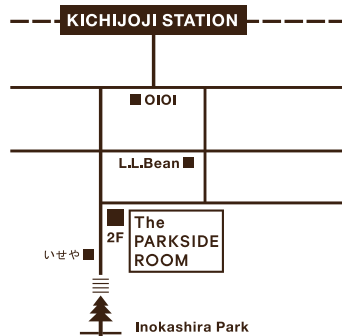


Shop Information

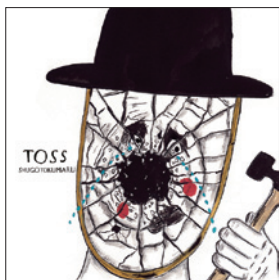


吉祥寺駅徒歩 5 分、井の頭公園近くの
メガネ・サングラスを中心としたセレクトショップ。

「単焦点レンズ」はもちろん、「伊達メガネ用レンズ」
「遠近両用レンズ」「ブルーカットレンズ」など多様
なレンズを取り揃えております。映画『PARKS』
にメガネの衣装協力をしています。〇〇



180・0003 東京都武蔵野市吉祥寺南町 1-17-1 2F
T/F 0422・41・8978 E-MAIL info@tpr.jp
URL <http://www.tpr.jp> OPEN 12:00 - 21:00 水曜日定休



『PARKS パークス』の音楽監修、 トクマルシューゴさんのニューアルバム『TOSS』発売中

トクマルさんの4年ぶりとなる新作は、谷口雄さん、イトケンさん、遠藤里美さんなど『PARKS パークス』にも参加されたミュージシャンのほか、数多くのミュージシャンたちとのコラボレーションやセッションから生まれたアルバム。最後の曲は特設のウェブサイトに世界中から投稿された音を素材にして作り上げたもの。まさにそれもまた「公園」。映画の前に是非ご一聴を。「PARKS」はさまざまな形でどこまでも広がり続けています。

トクマルシューゴ『TOSS』PCD-26065 定価:¥2,600+税



井の頭公園 園内放送に注目!

井の頭公園内で日々流れる園内放送。さまざまな注意事項が読み上げられるのですが、なんと、バンド「相対性理論」のやくしまるえつこさんによるアナウンスが流されているんです。そのバックに流れるのは相対性理論の「弁天様はスピリチュア」。これはパウスシアター閉館後に、相対性理論がパウスをスタジオ代わりにして録音した音源を元にして、井の頭公園の弁天様をイメージしながら作られた曲。毎日10時と12時と16時。弁天様あたりではとてもよく聞こえます。歌と現実とが溶け合った、まさにスピリチュアルな空間が出現します。是非一度お試しあれ。

フリーペーパー配布 ボランティア 募集中!

フリーペーパー『PARKS』は吉祥寺を中心に全国の映画館やライヴハウスなどで配布中です。吉祥寺周辺のさまざまな店舗への配布を手伝っていただけるボランティア、あるいは毎号設置していただける店舗やスペースを募集しています。ご協力願える方、下記までご連絡ください。

✉ parks100@boid-s.com

PARKS パークス

瀬田なつき監督作品 音楽監修トクマルシューゴ
2017年4月 テアトル新宿他にて全国公開

製作: 本田プロモーション BAUS 製作プロダクション: オフィス・シロウス
配給: boid 宣伝: VALERIA、マーメイドフィルム ©本田プロモーション BAUS

parks100.jp [fb.com/parks100jp](https://www.facebook.com/parks100jp) [@parks100jp](https://twitter.com/parks100jp)

フリーペーパー『PARKS』3号

2016年11月30日発行

編集 岩井秀世、樋口泰人 (boid)
編集協力 井戸沼紀美、中村悠太、柴崎祐二 (トノフォン)、
松田広子、小倉聖子 (VALERIA)、田中有紀 (boid)
写真協力 数下雷太、オードリーキムラ (SXSW Japan Rep)
タイアップ 栗田豊 (AGITO)
デザイン 中野香
発行 boid www.boid-s.com
東京都新宿区住吉町1-11 OSKビル602 ☎ 03-3356-4003

